

あの世への散歩道 ④



自然の死にかた

イラストと文 酒井 卯作 (民俗学者)

コロナウイルスの流行する前の話です。東京渋谷の盛り場の飲み屋で会があって、その帰りしな、奥の方の部屋から若い人たちの歌声が聞こえてきました。「みやこの西北」です。いわずと知れた、これを歌うのは早稲田大学の学生さんたちでしょう。

これを聞いて、フト私は19歳で兵隊にとられ、そして訓練の合間に同年兵同志で肩を組んで歌った「貴様とおれとは同期の櫻」を思い出しました。

同じ年代の青年たちの合唱ですが、「みやこの西北」の学生さんたちには、これからの将来の明るい夢があり、私たちの「同期の櫻」には、明日になったら散るかもしれないという暗い悲愴感がありました。

歌は人間を陽気にさせるものです。戦争中に軍歌で青春を迎えた私どもには、現代の若い人たちの歌が羨ましい、なんて考えながらトボ、トボと帰った覚えがあります。

若い人たちにめでたいという喜びはあっても、まだ別離の悲しみを知らない人たちです。死の世界を語るのは、あまりに距離がありません。だから明るいのかも知れません。

たしか昭和19年の暮れ、私たち兵隊は近くの航空隊の飛行機の土嚢を築くために土運びの使役に使われました。夕方帰隊してみたら、空襲のとき必ず私が立哨する兵舎の

前に米軍の直撃弾が落ちていて、私の代りに立哨していた隣の班の兵隊が粉微塵で、たそがれどき、兵舎の近くを、微塵になった兵隊の肉を、二本の箸を使って拾って廻ったのを、まだ鮮明に記憶しております。この死んだ兵隊は、母と子の二人暮しだったのだと、後で聞きました。

死というものの影には、かならず悲しみがあります。戦中派の人間の言動には、どこかその暗さが漂っています。その暗さを打ち消すために日本人は古くから二つの方法をとっていました。一つは仏教による永代にわたって死者の霊を祭り続ける方法。もう一つは死を断絶と考えて、早い時期に縁を切ってしまう方法。

(一)は、死者への思いやりがあり、懐かしい記憶をいつまでも抱いて、それを自分の生き甲斐に繋げる優しさがあります。(二)は冷酷にみえますが、死をもたらず悪霊を排除して早い時期に平常な生活に戻ろうという意味では良い方法だと思います。

どの方法をとるかはそれぞれの人の選択に任せるとして、民俗学の方法をとるとすれば、(二)です。

民俗学徒での大方の考えは、死は穢れと見ます。そして死をもたらず悪霊の存在を考えます。その証拠をいくつかあげてみます。

日本各地にあるのが「道切り」です。村境などにわざと大きな草履などをおいて悪霊を除けるのは、今でも関東地方に若干残っていますが、鹿児島県徳之島では、死者の出棺前に、近い縁者が死人の唇に酒を塗って、また自分でも唇に酒をつけて、それぞれ「これからはもう親でも子でもないよ」そう言って棺のフタを締めた。たぶん昔は道にシメ縄などを張って魔除けにしたのでしょう。

沖縄本島では不幸な死にかたをした者を嫌いますが、戦争などで外地で戦死した人なども、島外で悪事をして死んだと考えて、部落の中には一晩は入れないで浜辺においたといいます。これを「潮河渡り」といって、シマ(集落)以外で死亡すれば、その死にかたがどうであれ、それは不幸な死なのです。

もっとはっきりしているのは死者への悪口があります。福岡県築上郡吉富村(現吉富町)ではディオウチ(近所)は町行きと野組(火葬)の二つに分れ、野組の人たちは火葬をする直前に、死人に悪口を思い切り浴びせかけます。

どんな言葉なのかはその死人によって異なりますが、若い女性の死人の場合は、それは卑猥の限りを言って火葬の火をつけたそうです(旅と伝説六ノ七)。似た例では新潟県佐渡の相川でもあって、これは水難などのときというそうです。とにかく「かわいそう」などという、その人が海に引き込まれるといえます。下手に情をかけると、その人が死神にとり憑いてしまうおそれがあります(佐渡の一生)。死人への悪口は生きていた人たちが、自分を守るための餞けの言葉なのです。

こうした風習の中でわかるのは、死者をいつまでも祀り続けるのではなく、なるべく早く排除し縁を切ろうとする意向がみえるということ

です。死人に涙をかけるな、かければ死人が起きあがってくるなどというのも、死者との絶縁が大きな意味をもつと思います。俗に亡くなった人が成仏するという言葉は、もうこれから一切、供養する必要のない状態の死者になったということで、その時期は息の絶えてから50日から3年までです。

民俗学でいう日本人の死は、仏教者のいうように、いつまでも供養を続けることではなく、反対に、一刻も早く縁を切ることにありました。大自然の中で、自然の摂理にしたがって生き、そして自然の形で死ぬ姿が見られません。そこで参考になるのは、蝶の王者、アサギマダラです。

アサギマダラは旅の蝶です。サナギは黄金の色をしていて、成蝶すると羽は黒い紋様に赤味を加えて、その羽で日本の南北を約一千キロから二千キロの旅をします。その羽にさわってごらん、甘ったるいような優しい香りがします。

暑い季節には東北地方へ、そして寒くなると奄美大島などへ、それぞれの土地に咲く花を追って旅をします。秋の頃には本土ではフジバカマがあり、冬には南ではイジュヤモンパがあり、ヤマヒヨドリグサもあります。

この旅する蝶も一年もすると一生を終ります。知らない島の荒浜で、知らない白い小さな花の上に羽を休めて、そのまま一生を終ります。アサギマダラの生涯は、花を求めての生涯でした。白い花の上に自分の屍を押しつけて終るアサギマダラの死と、人間の死を重ね合わせて、人間の死はあまりにも人工的でケバケバシイ、そんな感じもいたします。

※つたない私の連載はこれで終わります。愛読していただいた読者の方に心からお礼を申し上げます。さようなら。